

ダンス学習における「新聞」の教材化について

A Study of the Using “Newspapers” as an Educational-Kit in the Teaching of Dance

体育教室 佐分利 育 代

I. はじめに

表現運動・ダンスは児童生徒にとっても教師にとっても取り組みにくい領域とされている^①。このうち児童生徒にとっての取り組みにくさの解決は、まず学習に対して心を開かせること、そして、学習内容を明確に把握させ見通しを持たせることである。

松本^②は、「課題学習」と名付けたダンス学習指導の実践研究を進めているが、そこにこれら2つの視点をうかがうことができる。すなわち、ダンスウォームアップによる心身のほぐしを強調していることと、学習内容を「課題」として学習者に明示して取り組ませていることである。松本はこの「課題学習」のねらいを、「過程は楽しく本質的にダンスに接近する体験であり、結果は確実な知識技能として各自が評価できる学習」と述べている^③。

また、ダンスの喜びを自我を革新するエクスタシー体験に見ている佐伯は、手段から目的への転換という体育授業に共通の今日的状況から、「ダンスを楽しむことのできる子どもを育てようとするならば、子どもが楽しめるそれぞれの内容を明確に押え授業に採り上げなければならない。」と主張し、ウォームアップで行なわれるようなリズムによって踊る楽しさも、学習内容のひとつとして明確に位置づけるべきであるとしている^④。

佐伯が、踊る楽しさと創作の楽しさを別々の内容で体験させることを考えているのは、現指導要領における表現運動・ダンスの内容が創造性を錬えることに傾きすぎており、自己革新へのエクスタシーを体験するまでに致っていないとの判断からである。しかし、もし、創作活動を通して踊る楽しさを味わわすことができなればそれは、教師の側の問題である。

教師にとっての取り組みにくさの原因は、経験の少ない教師でもダンスが指導できるような拠りどころ、つまり、指導の具体的方法、系統性、学習指導過程が不明確であり、また、楽しむ環境づくりが難しいからとされている^⑤。これらは教師側の受身的態度をうかがわせるものである。

A・ロックハートは、「指導に於ける始めの難問は、授業を始めるにあたっての気遅れだろう。」としている^⑥。三浦^⑦があげているような、「ダンスをすると、『エー、ウッソー』という声がかえってくるので、殆んど指導していない」という実態は、自信のなさによる教師の気遅れの現れである。

A・ロックハートは、気遅れに打ち勝つことさえできれば、良きダンス指導者になることができるとし、経験の少ない指導者は、まず他人の模倣や参考文献などを手はじめとし、そのまま取り入れる等の誘惑に次第に打ち勝って行って自分自身の立場にふさわしい方法を発見するように努力し

なければならないと述べている。児童生徒と同様に教師も心を開く必要がある。積極的にダンス指導の方法をみつける姿勢がこれまで欠けていたのではないだろうか。

体育の内容としてありながら、自己表現を特性としていることにもダンスが指導されにくい原因がある。というのは、ダンスの特性をふまえない指導方法がとられてきたことが多いと思われるからである。L・マレイはアメリカのダンス指導の過去の進め方におけるあやまりを次のように指摘する。^⑧「第一は、体操の時間のようにクラスが一斉に同じことをしなければ混乱しているように見えると考えたことである。第2の理由は、ゲームは子供たちを従わせるルールや規則にもとづいて行うのでそれと同じようにダンスの指導もなされるべきであると考えたことである。」

「体育か芸術か」の論争を受け、必要以上に体力を意識し、手段的であろうとしたり、逆に体育の枠内に止まらず教育における価値を力説したり経過が日本においてもみられた。楽しさへの転換期において教師は、他の種目がないダンスの特性そのものを楽しませることにもっと自信を持ちしかも身構えずに取り組むべきであろう。

次に、教師の気遅れや指導しにくい等、教師側の理由でのダンス学習の中断が児童生徒の精神的発達とダンス表現能力の不一致からの恥ずかしさやダンス嫌いを作っていることも無視できない。その上、これらの児童生徒と向かい合うことが再び教師の気遅れにつながっている。中学校での学習において経験に大きな差のある生徒やダンス嫌いを対象にしなければならないことは教師にとっての取り組みにくさを決定的にしている。

V・プレストンは、イギリスにおいても中等学校での生徒の動きに関する経験がまちまちなことを指導上の問題点としてあげている。^⑨プレストンは、「子どもの動きたいという欲求は大切に育まなければ減少してしまう。」と警告する。そして、まちまちな経験を持った生徒を目の前にしても中等学校指導者は、開拓者の仕事をする心構えを持たなければならないとまで言う。身構えて指導に向かわなければならないところに、教師としての取り組みにくさがある。ダンス学習の継続した指導こそ、児童生徒、教師共にダンス嫌いをつくらないために望まれる第一の条件である。

このようにダンス学習のかかえる問題をみていくと、児童生徒にとっての取り組みにくさは教師にとっての取り組みにくさの反映であることが改めて確認できる。A・ロックハートは、教師はダンス教材に精通し、確信と自信を持って児童生徒を導く責任があるとしている。

特に、初めてのダンス学習を経験する児童生徒には、享受から表現まで全てを含んだ形での学習が必要であり、そのためにはむしろ教師自身のダンス創作過程を系統的にたどらせる程の見通しがあっても良いと考える。自由な自己表現のためにダンス学習において教師が教えられるものは何か、それをどのように学習内容として設定し学習させていくのかの詳細な研究が必要である。

学習させようとする内容は、運動の課題や題材によって具体化されるが、それらを内包するものとして身近にあるものを教材に採り上げることは、教師にとっても児童生徒にとっても学習への取り組みを着実にしてくれると考えられる。教材の研究は、学習の過程を具体的にしてくれる。ダンス教材への精通は学習内容と児童生徒を結びつける教師の奥の手にもなり得る。

以上のような視点により、本稿では、ダンス学習に取り組みやすくする手がかりとして、教材による学習内容の具体化をとりあげた。そして、学習内容とのかかわりにおける教材の扱いについて、“新聞”を教材に学習指導を実践し検討することにした。教材としての“新聞”の可能性を探ること、少しでも多くの学習内容具体化の手がかりを得たい。

II. 教材としての“新聞”研究の経過

昭和56年度鳥取大学教育学部小学校教員養成課程における小学校体育実技(2)で、「いろいろな紙になる」をテーマに教材として採用した。教材として新聞の他にティッシュペーパー、段ボール、カレンダーの質の異なる紙を使用し、それぞれの特徴をとらえさせた。(前期に実施)

昭和57年度、昭和58年度の小学校体育実技(2)では、「いろいろな紙になる」から「新聞から得たイメージを持って表現する」に展開した。(前期に実施)

昭和58年10月から11月にかけて、上の実践結果をもとに、年令別の指導を行なった。対象は以下の通りである。

- 小学校中・高学年 (鳥取県立鳥取聾学校小学部)
- 中学生 (鳥取県立鳥取聾学校中学部, 鳥取市立東中学校)
- 高校生 (鳥取県立鳥取聾学校高等部, 鳥取県立青谷高校)
- 大学生 (鳥取大学教育学部ダンス(A)受講者)

この指導の過程と、それに基づいて各学習者が創った作品を、昭和58年11月23日鳥取市民会館において発表した。発表会名は、創作舞踊公演「しんぶん^①」である。

III. ダンス学習における教材

ダンスは内的体験の外在化の活動であり、文化として受け継がれてきた様々なダンスもまた、その時代、その社会における生きた表現であった。学習でのダンスも、「創る」「踊る」「観る」活動の全てを含んだ表現そのものとして体験させ、楽しさは、自らの内的リズムと外的リズムの一致^②の中で味わわせたい。

自らの身体を素材とし、身体運動を媒体とするダンスでは、内的リズムとは主体のとらえたイメージによって揺り動かされた心のリズム、外的リズムとは素材の動き、すなわち媒体としての身体運動の創り出すリズムである。これらのリズムの一体感による楽しさを味わわせるためには、技能のどの段階の学習にも、主体と素材という二つの自己(テーマをみつけ作品を創ることのできる自己と、演じることのできる自己)を伸ばす内容が含まれなければならない。

1. 自分自身の身体や身体運動を通しての原体験

ダンスの技能の段階は、とらえられる—続けられる、変化させられる—まとめられるのように押えられる。そして、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生のどの年令においても、初めてのダンス学習では、とらえられる段階にむけて原体験そのものが学習内容として採り入れられるべきと考える。それは、言語でとらえたイメージを動きで表現しようとしたところにこれまでのダンス学習の第一のつまづきを見るからである。ダンスが、イメージを動きに置き換える活動ではなく、動きとしてとらえたイメージを、再び身体運動を通して表現するものであることをまず知らせなければならない。

特に小学校高学年以上のダンス学習未経験者には、身体の動きでとらえるような原体験の機会を与えることは必要である。言語表現や内言による論理的思考能力の発達した段階での初めてのダン

ス学習では、できるだけ言語を介在させずに直接筋運動感覚に働きかける内容を準備すべきである。そしてダンスがこのような運動感覚を通してとらえたもの(内的模倣)^⑬の現われであることを印象づけ、身体や身体運動で体験できる世界の新鮮さに興味を持たせることである。

そのためには、恥ずかしさ一見られている自己一を感じさせない手だてと、むずかしさ一イメージと動きの不一致一を感じさせない具体性のある内容が用意されなければならない。教材はこれらの条件を具現化する手がかりとしての役割を荷っていると考えられる。対象と動きと感情の結びつきを直感的に体験させてくれ、ある意味では反射的に動きでとらえることに目覚めさせる内容が豊富に準備されることが望まれる。

日常体験する遊戯や生活場面で自然に開発される精神と運動の関係から、フォアオールダンス教育論を展開するラバンは、模倣ができる段階での指導について、「教師は子どもに、他の子どもを見、またすぐ見たことをやらせませぬ。こうして運動感覚を発達させ、同時に動作の意識を増していく機会を与える。」としている^⑭。日常生活において活動的な遊びの機会が少なく、体感で味わうことが少ないと思われる現代の子どもにとっての初めてのダンス学習では、身近な教材の動きを見ながら動く原体験は特に必要な内容と思われる。

2. 恥ずかしさを感じさせないための教材

見られている自分を意識することによる恥ずかしさは、ダンス学習の成立に大きな障害となる。身体はダンスの素材であるが、他人からは主体そのものとして認識されるものであるから^⑮、自分の身体の動きがどう見えているかについての不安、自分自身を人前にさらけ出すような感覚は、日常の限度をはるかに越えるものとして立ちはだかる。このことは、初めてダンスを体験する者には、学習意欲に対するマイナスの要因となっている。この感覚を感じさせないで学習に導入できるならば、「自分が何をどのようにとらえるのか」という主体的な積極的なテーマに取り組ませることができ、恥ずかしさから解放され人目を気にしないで動けるように、さらには踊っている自分を見ることができ、他人から見られている自分を感じながら踊ることを楽しむまでになれるならば、ダンスの表現もさらに深く広いものになり得る。

驚きのある新鮮な原体験を与えてくれる教材の存在は、それに向かっている自分のみを感じながら学習できるという意味で、他人の目を気にせず済む、有効な導入の手だてといえる。教材と向き合い取り組むことを通して、案外よく動ける自分や新しい自分を発見できるならば、他人に見られることはいやでなくむしろ見てもらいたくなるに違いない。

3. むずかしさを感じさせないための教材

ダンスのむずかしさは、身体運動を通してイメージを表出することのむずかしさである。これは素材一身体一が思うように動かないことと、媒体一身体運動一を構成する能力がないことを児童や生徒が感じてしまうところに原因がある。そして、さらに根本的な原因は、「一番表現したいことは何か」が自分自身にも明確でないこと、すなわち、何を現わしてよいのか、何をどうとらえるのかわからないという主体の問題である。特に初心者では、テーマを絞ること、何に興味を持ったかが漠然としており、モチーフとして対象をとり込むことにつながらない。

むずかしくなく、取り組みやすいダンス学習の手がかりとしての教材は、まず、①何をすればよいのかを具体的かつ明確に示すことができ、動きとして取り込むことが容易なものが選ばなければならない。そして、②変化に富んだ内容を持ち多様な発想の展開が可能なこと、③身体の運動を

カバーしてくれ、また、身体運動の範囲を越えた運動を与えてくれるものが必要である。

IV. “新聞”を教材としたダンス学習

1. 導入の手がかりとしての“新聞”

幼児や小学校低学年の表現運動や模倣遊びで、変身し、なりきって表現するための手がかりとして“新聞”を使った指導例が多い^⑩が、小学校高学年以上での初めてのダンス学習において原体験を与え、恥ずかしさやむずかしさを感じさせない手がかりとして、むしろ有効に利用できると考える。

それは、よく知っているはずの“新聞”が身体や身体運動と対比させながら見てみると、全く知らなかった新しい一面を持っていることに気付かせることから始めることができる。その驚きと楽しさは次のような感想に現われている。(昭和57年度小学校体育実技(2)受講者の感想より。以下の感想は全てこの時のものである。)

- 紙の特徴をつかめておもしろい。
- 今までと違った楽しさを味わえる。
- 身近かなものの中に知らないことが多い。
- 人の視点によらえ方の違いを知った。
- 感動的な目を持てる。
- 興味を喚起する。

また、教材の動きを直接見ながら表現できることは、テーマに対する不安感を持つことなく伸び伸びと動け、教材を通して児童生徒を動かす教師の側も、動く側も言葉の介入を極力少なくできる。

- 安心感がある。
- 思い切り動ける。
- 間近で観察し表現しやすい。
- 見るのではなく観ることの大切さを感じた。

そして“新聞”と向き合うことで、他人の目を気にすることなく表現に熱中できることが、恥ずかしさを感じさせないために大きい効果がある。

- 変身できる。
- 紙に生命を吹き込むことができる。
- その気になり、思い切り表現できる。
- 身近かなものだと感情が入れやすい。
- 自分の心の動きを感じる。

素材としての身体づくり、身体運動づくりにおいても興味を持って自分の動きの範囲を広げることができる。むずかしい動き、自分だけでは考えつかない動きを抵抗なく試すことができ、“新聞”の感じのする動きという感情と結びついた運動語彙を増すことに発展できる。

- 新鮮な動きをすることができる。
- 大きな動きができる。
- 身のまわりの様々なものに対して、いかにそれらしく動くか気を使う。

このように、年齢の高い学習者を対象にした学習の導入にも、「新聞」は享受と表現という、「創る」「踊る」「観る」活動全てを包含したダンスの基礎への教材として有効に利用することができる。そしてさらに、次の学習段階への展開の可能性を持つ教材といえる。

2. 発想の手がかりとしての「新聞」

「ニュースを載せた紙^⑭」であり、「定期的に刊行される報道媒体^⑮」として我々に新しい情報や知識をもたらしてくれる「新聞」は、テーマの宝庫である。「現在のこの時」(here and now)^⑯を反映するダンスの教材として「新聞」はまさにうってつけである。

一方日常生活の様々な場面で「新聞」は利用されている。ものを包む。型紙として。畳の下に敷く。水を吸いとらせる。すき間を埋める。ほこりよけ。掃き掃除の補助。割れ物保護用の詰め物として。半紙の代用として。かぶとを折って遊ぶ。種火用。保温用。等多くの発想で使われている。ダンス学習でも、このような日常の体験をもとにさらに多くの発想を湧かせてくれテーマを与えてくれる。

また、「新聞」の様々な字、白と黒の創り出す模様、カサカサいう音等、発想は無限に広がる。

3. 「新聞」を教材としたダンス学習

「新聞」を教材としたダンス学習は、表①のように行なった。

(1)「新聞」を使って動く

「新聞」を使っていろいろな運動を試すことはダンスウォーミングアップであると同時に、「新聞」を使った運動の原体験でもある。また、身体運動の範囲を広げる素材づくりとしても位置づけられる。

ダンスに抵抗を感じている児童生徒には「ダンス」を感じさせない運動として無理なく体験させることができる。「新聞」を使った運動をいろいろ試し、学習者自らも運動をみつける活動は、動きの感じを味わいながら変身や表現へと発展させやすく、ダンス学習の導入として有効である。

新聞の使い方

手に持って

体前に張りつけて

背中、腹、頭上等に乗せて

床に置いて

脚にはさんで

投げ上げて(広げて)

(丸めて)

運動

————走る 回る 屈伸 波動

————走る

————歩く はう 反る

————くぐる 渡り歩く 跳び越す 転がる 上に
 かって跳びながら進む

————歩く 走る 跳ぶ 転がる

————落ちるまでに何度もくぐりぬける 体で受け取る
 蹴る つき上げる

————取る 蹴る つき上げる

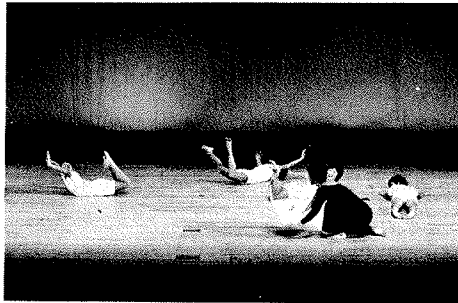


投げ上げて身体で受け取る

(2)“新聞”の動きをまねする

教師や友だちが動かす“新聞”の動きを真似することは“新聞”の体験であり、“新聞”への変身、“新聞”の表現である。すなわち、身体運動を通じた享受と認識、そして表現の最も直接的な体験としてダンスの基礎の内容を包含している。動きの手がかり、とらえる対象が目前にあるので、安心して動けいつの間にか変身し紙になりきることができる。特に高学年での最初のダンス学習には“新聞”対自分の関係のみの活動ができ、その中で内的体験を深められるため、恥ずかしさを感じずに済ますことができる。また、教師の動きを真似るのではなく、紙という思いがけないものの動きを真似ることによって、日常とは異なる動きが体験でき、興味を持って身体づくり、動きづくりに取り組む動機づけとなる。

紙の動き



曲げられる 伸ばされる 振られる
丸められる くしゃくしゃにさ
れる 包む 踏まれる 回される
折られる 投げ上げられて落ちる 丸
めて投げられる 転がされる つま
み上げられる やぶられる 風に吹
き飛ばされる 水に濡れる 乾く
木にひっかかる 紙飛行機 折り鶴
紙風船

(3)“新聞”を使って変身する

“新聞”をまもって変身する活動は、図画工作科における造形活動の楽しさを味わわせることをねらいとしての学習でも採り上げられている²⁰。ダンスでは、変身し、なりきって動き、そのものの気持を味わう体験のために、衣装や小道具あるいは風景にみたくて使用する。

この時の“新聞”は、イメージの広がりを助ける具体性のある手がかりとしての役割を果たすことができる。

幼児や、小学校低学年でのダンス学習の導入として、イメージから動きへの展開ができる。

新聞の使い方

背中につけて

巻きつけて

上に乗って

かぶって

丸めて棒にして

変身

————スーパーマン 飛行機 カメ 小鳥 みつばち ち
ようちよ

————お母さん すし みのむし ハチの巣 すもうと
り

————舟こぎ 魔法のじゅうたん シーズー 遊園地 サ
ーファー

————しし舞い かえる 花嫁 ロケット

————忍者 野球選手 探検家 ハチ 音楽隊



忍 者

振り回して

床に置いて

————ヘリコプター

————岩で遊ぶカニや魚 巣に帰る小鳥

(4)「新聞」を使って表現する

“新聞”を使ってイメージを広げ変身する活動はもう一方では、身体の延長として運動の範囲を拡大してくれる。そして媒体としての可能性を高め身体運動のもどかしさを柔らげて、思い切って動けるように助けてくれる。

グループでの表現でも、“新聞”という共通の手がかりを持っていることで動きがまとめやすい利点がある。

“新聞”を使っての表現は、あくまでも動きを引き出しイメージを広げる補助である。学習が進み、動きが自由に出せるようになってきたり、“新聞”を動かすことに気をとられすぎ、身体運動が小さくなるようであったら、使う必要はない。いらなくなったら使わなくても良いことを指示するようにする。

以下に掲げる題は、学習指導を実践する中で、グループで「風車」を表現した後に児童生徒及び大学生がみつめて表現したものである。

蝶の一生 クモ 鳥 ドラゴン

入道雲 海の風景 水 氷 氷河 木枯らし 台風 火山 花 寒さ

洗濯物 洗濯機 花火 祭 春のピクニック 甲子園 ミックスジュース 泳ぐ人と波 ポッ
ブコーン 雪あそび 輪転機 かくれんぼ カメラマンとモデル リンゴの皮をむく 交通事故



かくれんぼ

(5) “新聞” をテーマに表現する

“新聞”を使って動いたり、動きを真似したり、変身したり、表現したり等様々な体験は新たな、おもしろいイメージを湧かせてくれ、テーマを持った作品創りへと発展する。

創作舞踊公演「しんぶん」で発表した各作品について、プログラム順に題とテーマをとり出してみた(○印)。“新聞”によるモチーフも合わせて考察する(●印)。作品の指導は各学校の先生があたった。

1. PLAY……おもちゃの夢・折り紙 鳥取県立鳥取聾学校 指導・井上茂子先生

(1)おもちゃの夢 (中学部)

○夜になっておもちゃ達がおもちゃ箱からとび出してそれぞれの夢を話し出した。

●かくれる……おもちゃ箱、生き生きしているのをみせないかくれ家

(2)折り紙 (高等部)

○紙飛行機を飛ばせて遊ぼう あんなに遠くに飛んで行ったよ

●折る、飛ばすの体験をもとにしたイメージ

2. 世論 鳥取大学ダンスA受講者

○新聞の情報は論争を巻き起こす 群集心理を左右する情報の中で人々は孤独になる

●読む 戦う

3. 潮騒 鳥取市立東中学校 指導・和田知子先生

○光り輝く渚 くだける波の音、時には美しく、楽しく、また厳しく感じる

●新聞を動きの延長として使用 なびかせる、丸めて高くつき上げる、敷いて座り反る

4. 流転 鳥取大学教育学部体育専攻専修生3年

○飛ばされ、飛行し、落下し、燃え上がる紙飛行機に若者の生き方を投射

●群で折られる紙になって動く 1人1人で風にふるえる紙、群で燃え上がる紙飛行機になる

5. 四季 鳥取大学教育学部体育専攻専修生2年

○春夏秋冬の象徴的なイメージを表現、特に夏の輝く太陽、激しい波とサーファーで生き

生きとした若者の姿を、冬の雪遊びのあとで誰もいなくなった寄りどころのない寂しさに重点を置いた

- 春風、波、枯れる秋、新聞紙を震わせ音を出して訪れる冬、雪合戦（新聞紙を使って）



四季（春）

6. 活字の世界 鳥取モダンダンス愛好会

活字・前線発生・社説・スポーツ・歳時記・三面記事

- それぞれの欄のイメージを表現

活字……カチカチ動くイメージ、様々な文章を創り出す、どんな意味にも変わってしまう字

- 活字……カチカチ動く
前線発生……低気圧と高気圧がぶつかる
社説……切る
スポーツ……色とりどりの動き
歳時記……落ちば重なる
三面記事……ものみだかい人の目

7. 逃亡者 鳥取県立青谷高校 指導・小林貞子先生

- ろう獄より……手に入れた自由は……

- （記事よりテーマを得て）外の世界へ逃げる

8. 人間模様 鳥取モダンダンス愛好会 風坂佳子（鳥取豊学校教諭）

- 新聞は人間の生老病死の集約されたものだ、それらが私を苦しめるが、私はやはり今日も生きなくてははいけない

- 読む、生き生き動く、腰をかがめ老いる、もがき苦しむ、魂が死体からぬける、混ざり合ってせめたてる生老病死 存在への鼓動

各年令別に作品のテーマととり込まれている「新聞」のモチーフをみると、中学生では、媒体を拡大するものとして使いテーマを表現している。高校生は「新聞」からテーマを求め、テーマからモチーフを引き出している。大学生では、「新聞」を直接使ったり、あるいはイメージして動きを表現したりすることを通して別のテーマを表現するという二重性がみられる。大人の作品では、大

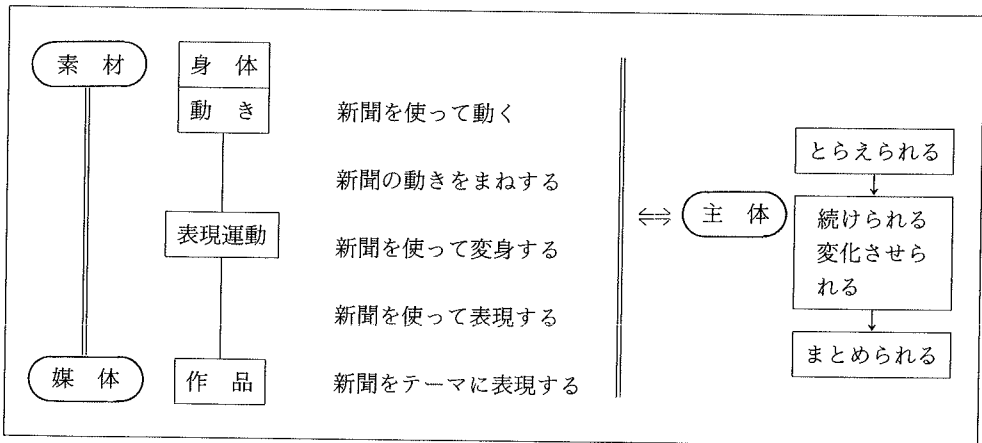
学生と同じようにテーマの二重性と、さらに構成面での深化がみられる。

“新聞”は、各年令においてもそれぞれの段階に応じた作品のテーマを提供してくれる、多様性のある教材といえる。

(6)新聞の教材化

以上考察してきた“新聞”を教材とした学習内容は、素材としての動きづくりから、主体がテーマを持ち、媒体としての身体運動（表現運動）を作品に構成できるまで表②のように並べることができる。

表② “新聞”を使った学習内容の位置



“新聞”を使って動く内容は動きづくりに重点を置いているが、“新聞”を使って変身する“新聞”を使って表現する内容へと展開するための導入でもある。動きがどんな感じを持っているかを気付かせる内容といえる。動きからイメージを引き出し、再びイメージを持ってその動きを自分の動きとして表現し味わう内容である。

一方、“新聞”の動きをまねする内容は、イメージから動きを引き出し、動きの多様性に気付かせ動ける身体をつくる内容である。この内容は、“新聞”をテーマに表現する内容、すなわち、テーマからモチーフを取り出し、動きを表現媒体として効果的に構成する内容と同一線上にある。動きはまた、再びイメージを味わえるものとして踊られる。

このように動きからイメージを引き出す内容も、イメージから動きを引き出す内容も必ず、再びイメージを伴った動きあるいは、動きを伴ったイメージとして踊られ、主体へと動きかける。

ダンスの教材は、各段階の学習内容に応じたものがその都度選ばれればよいわけであるが、“新聞”は、どの段階の学習にも手がかりを与えてくれる応用性のある教材として注目できる。

V. おわりに

教材として採り上げた“新聞”の多様な特性はダンスの学習内容を具体化し、教師と児童生徒の双方に取り組みやすさと探求への興味を与えるものであった。そして、“新聞”の教材化の考察は、改めて教師の学習内容への主体的な取り組みの必要性を示唆してくれた。

L・マレイは、「ダンスの教師は自分自身も運動を楽しむべきである。」としている^②。教師は日常出合う様々なものの存在とその動きを自らの運動感覚を通して受けとり、感動する内的体験を多く持たなければならない。この教師の体験が、児童生徒のダンス学習への最も明確な手がかりである。児童生徒の発達と欲求に配慮し、体験させたいこと、気付かせたいことは一度教師自身の中を通したもとして噛み砕いた形で提示することが新たな創造的な活動を引き出すため不可欠と言える。

“新聞”だけでなく、色々な紙、ゴム、タオル、カサなども身近な教材としてイメージや動きのヒントにできる。また、雨の降る日には雨を、風の日には風や揺れる木々を学習の場に持ち込むこともできる。児童生徒を取り巻く全てのものがダンスの教材や題材となり得る。理科や社会科や国語の学習で出合ったことも身体を通して表現してみることができる。児童生徒がそのことに気づき、身体や身体運動で体験できる世界を自ら楽しめるまで教師はあらゆる手がかりを与え続けなければならない。

“新聞”を教材としたダンス学習の経過から一般化できるものを取り出し、表③のような教材を使つてのダンス学習の手順を想定してみた。

表③ 教材を使ったダンス学習

学 段 習 階	学 習 内 容	学 習 活 動
(導 入)	教材による原体験	(1) 教師のとらえ方、表わし方を追体験し、教材と本時の学習内容への視点を得る (観る、踊る) (2) とらえ方、表わし方の手がかりを持って自分でとらえ表わしてみる (創る、踊る)
(展 開)	グループでの表現	(1) 自分のとらえ方、表わし方を持って、グループで見せ合いや真似し合いする (踊る、観る) (2) グループ表現でのとらえ方や構成の方法に関する学習内容の指示を明確に把握し運動を選ぶ (創る) (3) グループ作品を踊り込む (踊る)
(整 理)	作品の発表と鑑賞	(1) 原体験と、各自の表現の体験をもとに、グループ作品を発表し鑑賞し合う (踊る、観る)

学習の段階と教材によっては、個人のドリルとグループ表現の間にさらに2人組で表現をみつけ合う内容を入れて、グループ表現に入りやすくすることもできる。また、鑑賞の方法もクラス全体での発表の他、2グループや3グループで見せ合う方法をとれば、過度の緊張を感じさせないで踊ることができるし、互いの良い点もじっくり見ることできる。

ダンスの学習指導案を立てることは、ひとつの作品を創るのと同じだけの精力がいるといつも感じている。「この例示で実際に表現できるか」「この言葉かけで思い切り動けるか」常に教師自身の活動に置き換えながら立案しなければならない。教師自身が楽しさを味わえない内容は、児童生徒にも不明瞭な内容として不消化なままで終わってしまう。クラスの何人かの児童生徒が持つであろうイメージもいくつか予測し、それらに対応できる伴奏や言葉かけや動きの手がかりを準備することも必要である。そうしてこそ、児童生徒の思いがけない発想に驚ろかされる楽しさも味わうことができる。

アイデンティティが問題とされ、からだの危機が叫ばれている現代の児童生徒にとって、自分の目で見、体感を通してとらえ、表現し、認識を深めるダンス学習が楽しくダイナミックな活動であるために、教師自身のダンス観を前向きにしての教材研究が望まれる。

最後に、“新聞”の教材化に取り組む指針を下さいました松本千代栄先生、ダンス学習指導を共に研究し、児童生徒との学習の機会を与えて下さっている井上茂子先生、和田知子先生、小林貞子先生に心からお礼申し上げます。

注

- ①学校体育編集後記 学校体育 第36巻第10号 日本体育社 1983年
- ②日本女子体育連盟提案グループ
- ③松本千代栄 課題学習の発展——補綴と次段階のために——女子体育 第26巻第2号 日本女子体育連盟
- ④佐伯聡夫 ダンスの授業をめぐる諸問題について 体育科教育 第30巻第6号 大修館書店 1982年
- ⑤学校体育編集後記 ①に同じ
- ⑥A・ロックハート E・ピース ダンスの創作過程 大修館書店 1974年
- ⑦三浦弓枝 なぜダンスの授業はおもしろくないといわれているのか 体育科教育 第30巻第6号 大修館書店 1982年
- ⑧R・L・マレイ ダンス学習法 大修館書店 1974年
- ⑨V・プレストン モダンダンスのシステム 大修館書店 1976年
- ⑩A・ロックハートは、指導のための助言として23項目にわたって教師の心構えを説いている。モダンダンスのシステム ⑥に同じ
- ⑪ダンス学習指導研究と、一般への普及を目的とする、鳥取モダンダンス愛好会（代表、佐分利育代）が主催した舞踊公演。昭和58年度は第5回目、会全体のテーマを「しんぶん」とし、第1部では“新聞”を使ったダンス学習過程を小学生、中学生、高校生、大学生と指導者佐分利によって発表した。第2部、第3部は“新聞”をテーマにした作品を発表した。作品は、鳥取モダンダンス愛好会員及び、鳥取大学教育学部体育専攻生も発表した。
- ⑫M・N・ドゥブラー 舞踊学原論 大修館書店 1974年
- ⑬J・マーチン 舞踊入門 大修館書店 1980年
- ⑭ルドルフ・ラバン 現代の舞踊教育 明治図書 1972年
- ⑮市川浩 精神としての身体 勁草書房 1975年
- ⑯井上都美子 相場子 子供の心を育てる楽しい模倣遊び 女子体育 第21巻第9号 1979年
松本千代栄 こんな方法で内容をひろげ深めたい 女子体育 第24巻第8号 1982年

松本千代栄編 ダンス・表現・学習指導全書 大修館書店 1980年

他

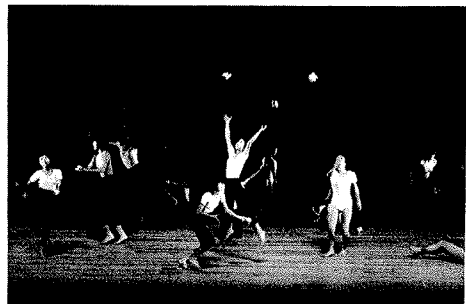
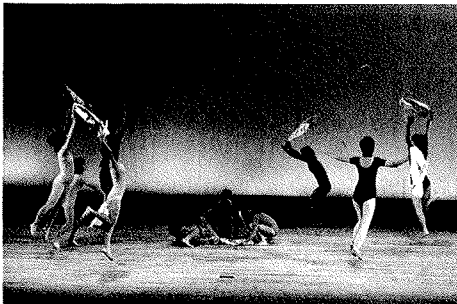
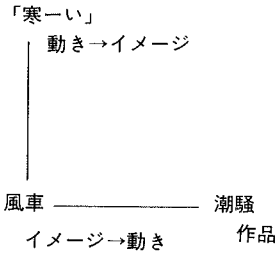
⑰平凡社国民百科辞典 1977年

⑱旺文社百科辞典エポカ 1983年

⑲A・ロックハート E・ピース ダンスの創作過程 大修館書店 1974年

⑳樋口敏生 西野範夫 官副正克 新学習指導要領の指導事例集 図画工作科1造形的な遊び 明治図書 1979年

㉑R・L・マレイ ダンス学習法 大修館書店 1974年



表① “新聞” を教材としたダンス学習の経過

(昭和58年10月～11月のうち2時間実施)

学 習 内 容	学 習 活 動
<ul style="list-style-type: none"> ○新聞に描かれた人の動きを真似する。 ○新聞の動きを真似する。 ○新聞を使っているいろいろな動きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師が持っている新聞に描かれた人のポーズを真似し、教師が動かす通りに動く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">中・高・大学生</div> <ul style="list-style-type: none"> ○リズムカルな曲に合わせて、絵が踊ると同じように踊る ○教師が動かす新聞になって動く。 ○友だちが動かす新聞になって動く。 ○新聞を使っているいろいろな運動を試してみる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin-bottom: 5px;">小学生・中学生</div> <ul style="list-style-type: none"> ○新聞を使って変身する。 ○新聞を使って変身できるものをみつける。 ○新聞を使って変身できるものを友だちと出し合う。 ○グループで変身する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師のみつけたものに変身する ○新聞を使って何に変身したいかみつける。1人で沢山みつけ、その中からおもしろかったものにもう一度変身する。 ○5・6人のグループで各自がみつけた変身を出し合い、真似して変身する。 ○おもしろかった「変身」をもう一度、グループ全員でやってみる。 ○隣の班と見せ合い、何に変身したか当て合う。 (アンコールの班の変身を全員で観る)
<ul style="list-style-type: none"> ○新聞を使ってグループで“風車”を表現する。 ○色々なテーマをみつけグループで表現する。 ○グループでテーマをひとつみつけ表現する。 ○新聞を使った表現を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○7・8人のグループで風車をつくり回る。 2種類創ってみる。 ○1人ずつテーマを出し合いグループで表現する。 ○出し合ったテーマからおもしろかった表現をひとつ選び、そのテーマの動きをさらに2つみつけて表現する。 ○感じを味わいながら発表し、鑑賞する。

(昭和 59 年 4 月 30 日受理)

